

ノラネコ問題の住民「参加」ワークショップ

自治体の職員の方から、住民参加のワークショップをしたいのですが、何人くらい集めればよいですか。という相談が多い。経験的に、こうした方は「10人では少なすぎるし、30人だと多い(頭数を揃えるのと毎回の連絡調整が大変だ、という理由で)」という平均的感情を持っているようだ。ついでに言うと、「ワークショップ開催の目的も、ゴールも、話し合う中身も、全部企画し決めてください」に近い仕事の依頼のされ方が、少なくない。で、なぜか開催回数だけは、5回とか決まっている。月1回のペースで開催すると決めて計算するからそうなる。

現実、時間的な制約はあるが、何よりも「参加」の意味をよく考え、その上で、誰と、何を何回ワークするのかを検討することが大事。やってみると、かなり力が湧いてくるはず。

例えば、ノラ猫問題ワークショップを企画してみましょう。

状況設定 ノラ猫のエサヤリさんが住む通称「ネコ屋敷」と「ネコファン公園」がある町内会で、「動物愛護派」と「駆除してしまえ派」の対立が表面化。血で血を洗う抗争に発展か？ ついにネコ屋敷の塀の前に白い粉がまかれた。

まず、誰を呼ぶか。愛護派と駆除派の住民は必須でしょう。それに自治会長さんでしょうか。現実、その当たりから始めてみましょう。結論から言うと、それでは不十分なのですが・・・。

具体的な作業としては、最初「ノラ猫の困りごと」をカードに書いて出し合い、次に「解決策」を出し合う、と言う流れを考えるのが一般的でしょう。「まちにネコがいるメリット」についてのカード出しが加われば、上出来です。しかし、やってみると、カード書きで要求する内容とは離れて、以下のような意見、信条、心情の放談会になってしまいます。

- ・ 同じ命の尊さなのに、殺すなんて人間の身勝手は許されるもんですか。
- ・ ノラ猫なんか一網打尽にしてしまえ(自分以外の誰かが、・・・最後は行政が)
- ・ ファン禁止の看板の前で平気でさせる。犬の散歩のときのビニール袋は見せかけ。

こうした類の意見の表明段階は、どうしても通過しなければならないのですが、その先を考えることが大事です。動物愛護に関わる人なら、「エサヤリさんは決まって後家さんだ」と言うのは、そうだと納得するでしょう。エサヤリさんはきっと母性の強い人で、ネコがひもじい思いをするのが不憫でしかたないのでしょう。その上、地域で孤立していることが多い。この人からネコを奪い上げるのも不憫です。でも、ワークショップでは、下手をすると、このエサヤリさんの首に誰が鈴をつけるか、という話にならないとも限らない。そうなれば、行き着く先は行政と決まっている。行政としては、何のために住民参加をしたのか分からなくなる。

問題の本質は、ネコをどうするかではなく、エサヤリさんの高齢者福祉(話し相手とか食事の指導)であり、ネコを捨てることを未然防止することです。一網打尽策が無意味なことは考えれば分かることです。愛護派も駆除派もエサヤリさんも、実は被害者。当事者は、別のところにもいます。大学周辺では、学生が卒業時にネコを置き去りにしていくのでノラ猫が多い。ペットショップは、客に対し「捨てないで下さい、不妊手術を受けさせてください」と積極的に勧めた上で生き物を販売すべきだ。そういうCSRを尺度に、ペットショップを格付けする仕組みも作ってみたい。そんなワークショップを開くなら、参加すべきは、学生であり、アパートの大屋であり、ペットショップ関係者です。より意味のある、実のあがる「参加」を実現する努力が大事です。(参考 <http://thothhouse.com/modules/workshop02/index.php?id=14>)